ISSN 0914-3157

ほんのしるべ

書標

2019.
2月号

2019年2月5日発行（毎月1回5日発行）
通巻483号　昭和61年7月15日第三種郵便物認可

世界の本屋さん vol.86

中国・内モンゴル フフホト　新華書店

ノセ事務所　能勢　仁

面積が日本の二十五倍もある中国は広い。モンゴルは内と外があり、外はモンゴル国で、相撲力士を送りだしている国である。首都はウランバートル。外モンゴルの南部はゴビ砂漠である。今回訪問したのは内モンゴル（内蒙古）であるから中国の一部で、内モンゴル自治区だ。黄河の源流に近い。北京、上海への直行便は飛行機でも自動車でもある。社会主義国家のインフラの充実には驚くのみ。この地は大部分が標高千米以上である。遊牧民と草原の地方として有名だが、今は砂漠化現象に悩まされている。遊牧は国として禁止されている。

内モンゴルの人口は二三八四万人で、省都フフホトは二六九万人である（二〇〇四年）。市内に国営書店は新華書店一店しかない。新華書店は中山西路のメイン道路に面している。店舗の一・二階は大型電器店で、新華書店は三階ワンフロアー八〇〇坪の総合大型書店である。エスカレータで三階の店に入ってびっくりするのは、ガードマンの出迎えである。手荷物を、店側で用意したリュックサックに入れて背負わせるのである。万引き予防のためである。

市内にある五つの大学を意識してか、医学書、理工学書、社会・人文書、文学、芸術書が充実していた。参考書、児童書も多い。子どもの本売り場の前に、子ども服コーナーがあったのが面白かった。売り場は親子連れが多く、子ども達の座り読みも万国共通現象である。

この店の照度の低いことが気になった。国営書店全体の根本的な問題だと思った。

（表紙題字・陳舜臣）

「いま、皆さんで巻き寿司を食べていらっしゃいます」女中は笑いをこらえている。たぶん、関西の生まれではないのだろう。

節分の夜に、家族そろって、巻き寿司を、一本ずつ、無言で食べるとその年は無病息災で過ごせるという言い伝えに、私たちは従っている。

小林信彦著
『小林信彦コレクション　唐獅子株式会社』
（フリースタイル）より

もくじ

世界の本屋さん 86　1
「書標」歳時記〈2月〉
著書を語る(582)『クルルちゃんとコロロちゃん』　松本　聰美　2
書標・書評　『フーガはユーガ』ほか　4
特集　世界の起源　6
読む野球　文系野球のススメ　10
今月のおすすめ
コンピュータ 15　自然科学 16
医学書 17　社会科学 18
人文科学 20　文学・文芸 21
文庫・新書 22　芸術 23
実用書 24　地図・旅行書 24
語学・辞典 25　児童書 26
読者から　27
インフォメーション
本屋うらばなし「時刻表」　30

※表示価格はすべて本体価格です。

『クルルちゃんとコロロちゃん』

松本　聰美

〈クルルちゃんとコロロちゃんは、なかよし……じゃあ、ありません。〉――そんな言葉でこのお話は始まります。お互いが、「あの子って、ちょっとイヤだな」と思っていたのです。でも、あることを通して、どんどん仲良くなっていきます。そのあることとは、「長さを測る」ことでした。

本の帯には〈算数が楽しくなる童話　小学二・三年生から〉とあります。

算数的要素を含んだ本としては、以前にも『アルルおばさんのすきなこと』（国土社・一二〇〇円）を出版しています。

クッキーづくりが好きなアルルおばさんが、クッキーを作りすぎて体を傷めます。愛猫テッティを抱っこしたい一心でリハビリを開始。少しずつ重いものを持ってトレーニングするのです。訓練の甲斐あって、やがて全快。でもおばさんはここで終わりません。続いてパワーリフティングに励むようになりました。おばさんはいいます。「わたしが　すきなのは、クッキーをやくことだけだと思ってたわ。でも、ちがってた。おもいものをもちあげるのも　だいすき」と。

――人間の体の中には、本人が気づかない能力が眠っている――この作品に込めたかった私の想いです。それは私自身へのエールでもありました。書き終わると、そういう想いに、「重さ」という算数的要素が加わる作品となりました。最初から意図したわけではなく、結果としてこうなったという一冊でした。

ところが今回の作品は、編集者さんとの打ち合わせの段階で「長さ」を書くと決めました。「重さ」の次は「長さ」に挑戦！と考えたのです。

子ども読者の身近な物として「長さ」をどう描くか、主人公たちが胸躍らせる「長さ」とは……。思い悩む日が続きました。

そんな中、ふと頭に浮かんだのが亡き祖母の姿です。祖母は縫物など、生活の場面場面で自分の手をものさし代わりにしていました。それを見ていたからでしょう。私もいつの頃からか手を広げ、「私の親指の先から小指の先までは十八センチ」と重宝するようになりました。買いたい洋服の肩幅や家具の寸法など、指を尺取り虫のように動かして、おおよその長さを知るのです。

この身体尺をお話の中に取り入れよう、と決めました。

一方、私はかねてから、土手を走る少女を書きたいと思っていました。手元に一枚のポストカードがあります。ガース・ウイリアムズ描く『プラム・クリークの土手で』（ワイルダー作）

のポストカードです。スカートを翻して少女が土手を走っています。女の子の行く先には楽しいことが待っているのでしょう。私の頭の中で、もうひとりの女の子が川向こうの土手を走り出しました。

クルルちゃんとコロロちゃんの原型、誕生です。

舞台は、ヨーロッパのにおいのするどこかの町。そんな町の様子を画家平澤朋子さんが豊かに、魅力的に描き出してくださいました。いなくなった黒ネコを絵の中で探したり、ものさし売りのおばさんの洋服に思わぬ発見をしたり、読者はストーリーとは別に、さし絵の隅々までを楽しんでくれることでしょう。

クルルちゃんとコロロちゃんは手を使って様々なものを測っていきます。二センチを測らねばならない場面が出てきました。二センチ……、手でどう測ればいいのだろう。思案の末、クルルちゃんの小指とコロロちゃんの小指を合わせることにしました。

ほぼ作品が出来上がった頃、千葉市科学館で「はかる展」が行われ、編集者さんと訪れました。精密な計測器、計量器などと並んで、身体尺についてのコーナーがありました。親指以外の指一本分の幅が、ディジットという長さの単位になっていることを知りました。クルルちゃんたちが指を合わせて一単位としたことは、突拍子もないことではなかったと、うれしく思いました。

ふたりは、体では測れないような長さも、毛糸にしるしをつけて、十メートルずつ交互に測っていきます。これは、編集者さんと私で実際にやってみた方法です。公園で行ったので、将棋をさしているおじさんたちが「あんたたち、なにやってんの?」と不思議そうに見ていました。でも私たちは平気。編集者さんが落ち葉の上に寝転んでクルルちゃんのように両手を広げ、その幅も測りました。木の幹の太さもふたりで次々に測りました。「長さを測るだけなのに、なんて楽しいんだろう」、私は思いました。ふたりでするから楽しいんだということも、実感しました。

この物語は、次のような言葉で終わります。

〈やっぱり、コロロちゃんはちょっとかわいこぶっていて、クルルちゃんは、ちょっとらんぼうかもしれません。でも、ふたりはなかよしです。とってもとっても、なかよしです。〉

『クルルちゃんとコロロちゃん』
出版ワークス・1,300 円

書標・書評

『フーガはユーガ』

伊坂幸太郎著　実業之日本社・一四〇〇円

初めて読んだ伊坂幸太郎の小説は『重力ピエロ』（新潮文庫・七一〇円）であった。仙台の街で起こる連続放火事件を通して浮かび上がる家族の真実を描いたこの物語を読んだ時から、私はずっと伊坂幸太郎の小説が好きだ。

伊坂幸太郎の小説は、どんなに深刻な題材であっても、物語の中で交わされる洒落た会話や言葉によって軽快に進行していく。しかしそのさりげない文章の中に大切なことがたくさん詰まっているのだ。『重力ピエロ』の中で主人公の弟である春が言った、「本当に深刻なことは、陽気に伝えるべきなんだよ」という言葉をそのまま体現しているような小説だと、私はいつも思っている。

一年ぶりの新作『フーガはユーガ』は、タイトルからも想像できるように双子の兄弟の物語だ。決して幸せとは言えない家庭環境で育った優我と風我。二人だから乗り切ることの出来た日々。そして二人の誕生日には必ず彼ら二人だけの特別な「アレ」が起こる。そんな誕生日に起こった愉快なこと、不愉快なこと、恐ろしいこと。「アレ」の力を使えば自分たちに暴力を振るい続ける父親をどうにかできるだろうか。そして大切な人をヒーローみたいに救うことができるだろうか。

確実にそして軽快に回収される伏線と、次々と展開される物語。優我の視点で語られるこの少し悲しい物語は、一度読み始めたら止まらない。（オ）

『HUMAN＋MACHINE』

P・R・ドーアティH・J・ウィルソン著　東洋経済新報社・二〇〇〇円

敵か、味方か？ 仲間か、ライバルか？

産業に、職場に深く侵入しつつあるAI（人工知能）に対して労働者が抱きがちな二者択一的な問いは、不毛で無意味であると本書は説く。同時に、AI導入を人手不足の穴埋め、もしくは人件費削減の手立てとしようとする経営施策は、すぐに頭打ちすると。

従来のオートメーションやIT技術と違い、AIは、労働者が一方的に支配される、または逆に問題解決を委ね切れる技術ではないからだ。AIは、データがない状況をも切り抜ける人間のスキルに学び進化し、人間は、膨大なデータを前に優れた能力を発揮するAIに助けられてより創造的な仕事を目指す。製造、研究、事務作業、マーケティングから接客に至るまで、さまざまな具体例を挙げながら、AIと人間の相互補完→進化こそが、企業のパフォーマンスを最大化できることを、本書は主張する。

だが、だからこそ、労働者も安穏としていられない。

〝現在の問題は、ロボットが人間の仕事を奪っているということではない。AIのような新しいテクノロジーによって急速に進化している仕事に対して、求められる適切なスキルを備えた労働者が不足しているということなのだ〟。

そのスキルは、決して機械学習やプログラミングといった技術領域での専門能力ではない。AIとの融合・協働で人間に求められるのは、「創造力や即興力、狡猾さ、判断力、社交性、リーダーシップといった人間が持つ力」なのである。

AI時代には、人文学こそが要請されているのだ。（フ）

『数学の真理をつかんだ25人の天才たち』

イアン・スチュアート著

ダイヤモンド社・二二〇〇円

科学のどの分野でも、いまでは見方が違っているとされているものは少なくない。アリストテレスの運動の理論はガリレオ・ガリレイやアイザック・ニュートンによって覆されているし、ニュートン力学における時間と空間の絶対性は、アインシュタインの相対性理論によって一変した。物理学においては、知覚や経験による仮説と、実験・検証による理論に差異が生じることがしばしばある。

では数学は絶対不変の原理である、とは残念ながら言い切れない。ゲーデルの無矛盾性定理や不完全性定理によると、理論体系に矛盾が無いとしても、その理論体系は自分自身に矛盾が無いことを、その理論体系の中で証明できないからである。

それでも数学は、真理を求める探究者によって、洋の東西を問わず様々な国と地域で研究されてきた。本書ではアルキメデスの古代ギリシャに始まり、近現代まで奮闘してきた数学者たちの偉大な活躍を、様々な資料を基に子細に描いている。

円周率πの近似値を改良した中国の劉徽、何百年も答えの出ない命題を世に著わしたフランスのピエール・ド・フェルマー、第二次大戦中、解読不可能だと言われていたエニグマ暗号を解読し、戦後は現在のAI発展の先駆けともいうべきチューリングテストを提案したイギリスのアラン・チューリング等々。著者が選出した二十五人の数学者を、彼らの人となりや、数学理論を作り出すに至った社会的立場、生活環境とともに一般人にもわかりやすい形で表現している。

飽くなき探究心を持って時代を切り開いた、偉大な数学者たちの実態を垣間見れる珠玉の一冊。

（徳）

『月まで三キロ』

伊与原新著

新潮社・一六〇〇円

まず、言っておこう。理系は苦手だった。ものの見方、価値観が変わった。

六つの短編は、どの話も心に沁み込み、別の世界へ誘ってくれた。無機質と思われた自然が、人の想いと繋がって、ロマンに満ち、何とも言えない体温を感じさせた。

表題作「月まで三キロ」は、息子への想いで辛い過去を持つタクシー運転手が、自殺しようとしている男性を月まで三キロの地へ案内する。月には表と裏があり、月の裏側は人間には見えない。月の裏側、それは孤独で閉ざされた一面。タクシー運転手はあるものにそれを重ねる。自殺しようとしている男性は、月まで三キロだと、そう月を見上げて、あることへと思いを馳せる。

自分も月を見上げて生きていこう。疲れた心、辛いことも乗り越えられるという気持ちをおこさせてくれた。

「エイリアンの食堂」この短編が特に好きだ。母親を亡くし、定食屋を営む父親と二人暮らしの小学生の娘・鈴花。「プレアデス星人」と娘から言われた、毎夜定食を食べに来る女性。「プレアデス星人」の彼女は、世界で一番小さい物を研究していると同時に、世界で一番大きいものを研究している。彼女は「一三八億年前に生まれた」と鈴花に言う。あなたも私も、一三八億年前の水素でできている。水素は、繰り返し、繰り返し、ずっと。

鈴花のこの後のくだりは、心が震える。鈴花は、その存在、かけがえのない存在をいつも感じて。私は、彼女たちと一緒に叫びだしたくなった。

この短編集は、読む前と読んだ後では、何かが変わると確信する。

（マ）

愛書家の楽園

世界の起源

ご担当のOさんに「本当に大丈夫ですか?」と何度も確かめてしまった――。良書との出会いを、十年近くにわたって手助けしてきた「愛書家の楽園」フェア。今回は新参者の私が、ズバリ「性器」関連書籍を選書した。

近年フェミニズム関連書籍が増えるにつれ、セクシュアリティをめぐる言説、つまり「性器」関連書籍も増えている。良書が多い反面、なかなか店頭で見つけられなかったり、手に取るのに勇気が必要なこともしばしば……。ぜひこの機会に、思い切って読んでみませんか?

女性器

女性にしかないという快感のための臓器、クリトリス。近年この器官は、実際は体内に長く広がることが判明し、海外では擬人化されたアニメーションが作成されるなど、女性の解放の大きなシンボルとなっている(私も先日イギリスからクリトリスの形のピアスを輸入した)。アレクサンドラ・ユバン、カロリーヌ・ミシェル著、永田千奈訳『クリトリス革命 ジェンダー先進国フランスから学ぶ「わたし」の生き方』(太田出版・二〇〇〇円)は、性科学者とジャーナリストのコンビによって執筆されたフランスのベストセラーの翻訳で、前半部は性科学と文化史、後半部は実践編とで構成されている。この良書が、その直接的なタイトルのせいか否か、なかなか書店に置いてもらえないと聞いたことが、このフェアを考えるきっかけとなった。(その後、性器関連書籍をリストアップしたところ、その多さに驚いたのだが――。)

『禁断の果実
女性の身体と性のタブー』

クリトリスのほか、女性器・女性のオーガズム・生理と広範にわたり「性器」についてコミックで綴ったのが、リーヴ・ストロームクヴィスト作、相川千尋訳『禁断の果実 女性の身体と性のタブー』(花伝社・一八〇〇円)だ。この本は、本国スウェーデン以外もフランスやドイツなどで一大ブームを巻き起こしている。女

性の性器をめぐる言説やイメージがどのように形成されていったのか――絶え間なく繰り出される独自のスウェーデン・ギャグに吹き出しながらも、サクサク読み進めることができる。コミックの中で紹介されている古代からの文化的事象、性をめぐるイメージの固定化について、さらに詳しいことを知りたい方にはキャサリン・ブラックリッジ著、藤田真利子訳『ヴァギナ　女性器の文化史』（河出文庫・一二〇〇円）、イェルト・ドレント著、塩崎香織訳『ヴァギナの文化史』（作品社・二四〇〇円）をおすすめしたい。

『ヴァギナの文化史』

話は変わるが、某書店の店長さんに『禁断の果実』の営業戦略を相談した際に、男性は自分の性器を毎日目にし意識しているが、女性は違うんじゃないか、と言われたことがあった。確かにそうかもしれない。原田純著、たつのゆりこ指導・監修『ちつのトリセツ』（径書房・一四〇〇円）は出版社も経営する著者が、世界では常識だという「会陰マッサージ」をおっかなびっくり実践していくベストセラー。周囲のお姉様方の評判も高い。年齢を問わずにおすすめしたい。

男性器

前出の書店の店長さん曰く「毎日目にし意識している」という男性の側の性器。でも、本当のところを知っていますか――？

ジェシー・ベリング著、鈴木光太郎訳『なぜペニスはそんな形なのか　ヒトについての不謹慎で真面目な科学』（化学同人・二五〇〇円）は、アメリカの学者によるエッセイ集。どうしてそれがぶら下がっているか、どうしてそんな形なのか。日々湧き上がる（かもしれない）疑問を、面白おかしく、科学の面から解説してくれる。

マルク・ボナール、ミシェル・シューマン著、藤田真利子訳『ペニスの文化史』（作品社・二八〇〇円）は、前掲の『ヴァギナの文化史』が女性器をめぐる表象を扱ったものであるのに対し、男性器の大きさや機能などについて悩んできた男性たちが、いかなる対策をとってきたのかに重点が置かれている。両書を比較して読むのも面白いだろう。

『どうぶつの
おちんちん学』

さらに、精子の成分から、猿などの睾丸まで比較し図解した榎本知郎『性器の進化論　生殖器が語る愛のかたち』（化学同人・一五〇〇円）、ならびに、さまざまな動物の断面図を多数掲載した浅利昌男監修『どうぶつのおちんちん学』（緑書房・一六〇〇円）も「その部分」がどのように成り立っているのかを丁寧に教えてくれる、最初の一冊に最適な本だと言えるだろう。後者は、最近海外への流出が問題となった牛の精子の採取の仕方など、知らなかったけれども知ろうとも思っていなかった、生き物の男性器にま

つわる興味深い知識が満載で、ひとに話したくなる。表紙もとても可愛いので、家に置いても違和感がないだろう。

性器切除

「性器」について語るのであらば、避けられないテーマがある。それが、アフリカやアジアなど三十カ国で行われている女性器切除（ＦＧＭ）の慣習だ。

これは、女性の性欲をコントロールするなどの名目で、強制的に女性器の一部を切り落とす伝統的な儀式であり、劣悪な衛生環境により手術自体で命を落とす危険があるほか、その後も例えば出産時のリスクの増大など健康面の問題、そしてもちろん心理的なダメージを与えるものとして、ユニセフを中心に、こうした慣習を止めようとする活動が世界中で行われている。しかしすでに世界中で二億人の女性が手術または処置を受け、今後も二〇三〇年までにさらに一・五億人が女性器切除を受けることが予想されている。

ワリス・ディリー著、武者圭子訳『砂漠の女ディリー』（草思社文庫・九五〇円）は、ソマリア出身のスーパーモデルの著者が、自身が五歳の時に女性器切除（女子割礼）を受けさせられた経験について語った世界的ベストセラー。（のちに「デザート・フラワー」の題で映画化もされた。）

『砂漠の女ディリー』

キャディ著、松本百合子訳『切除されて』（ヴィレッジブックス・七四〇円、在庫僅少）は、七歳で女性器切除を受けさせられ、十三歳で強制的に結婚させられたセネガル生まれの著者による自伝である。詳しい女性器切除の叙述は、とてもショッキングだ。

以上のような女性器切除と同列に並べることには抵抗があるが、日本でも女性器が切り出されて見世物にされた例がある。「毒婦」と称され、日本で最後の斬首刑に処せられた殺人犯・高橋お伝。彼女の女性器は死後、東京帝国大学医学部で標本として保存され、戦後には元七三一部隊の医師が所有して「性生活展」の目玉として浅草で展示されもした。大橋義輝『毒婦伝説　高橋お伝とエリート軍医たち』（共栄書房・一五〇〇円）は、高橋お伝本人とその性器標本が歩んだ、信じられない近代史を浮き彫りにする労作だ。前掲のスウェーデンコミック『禁断の果実』では、優生学的な考えのもと、大きい外陰部は黒人の劣等性を表すとして見世物とされた挙句に、性器標本が作られた女性サラ・バートマンの例が登場する。

性器と芸術

日本国憲法では「表現の自由」（第二十一条）が保障されているが、そこには「公共の福祉」による制約が課せられるとする。さらに税関では「公安又は風俗を害すべき書籍、図面、彫刻物その他の物品」が「輸入が禁止されている品物」として挙げられている。しかし、芸術の分野では、性器を題材・モチーフ・テーマにした作品は世界中で多数作成され、高い評価を受けているものもある。草間彌生の代表作である「ソフト・スカルプチャー」も男性器をかたどった作品だ。どこまでが芸術で、どこからが卑猥なの

か――？

こうした芸術と性器についてのせめぎ合いの例で、いちばん記憶に残っているのは、「ろくでなし子」裁判であろう。ろくでなし子『ワイセツって何ですか？「自称芸術家」と呼ばれた私』（金曜日・一四〇〇円）では、自身の女性器を3Dプリンター用のデータにして配布したことや、アダルトショップで展示していた「デコまん」をめぐって二度も逮捕された経緯、裁判や勾留なども描いた漫画や、対談などを収録している。少し時間が経った今だからこそ、ぜひとも経緯を振り返ってほしい。

木下直之『せいきの大問題　新股間若衆』（新潮社・一八〇〇円）は、江戸の春画から現代作品に至るまでの、芸術作品における性器の扱われ方をまとめた一冊。黒田清輝の腰巻事件にも触れられており、『ワイセツって何ですか？』とも併読をおすすめしたい。

性器の文学

芸術だけでなく、もちろん文学でも性器は重要な作品テーマとなっている。

フォークナー作、加島祥造訳『サンクチュアリ』（新潮文庫・六三〇円）は、性的不能の男がトウモロコシの穂軸を使って強姦する場面が登場するが、性器が自分に付随するものなのか、道具としてそこにあるのか、自己統制ができるのか、それとも、穂軸のように自分と切り離されたものとして存在するのか――等々、多くのモヤモヤとした疑問を引き起こす。

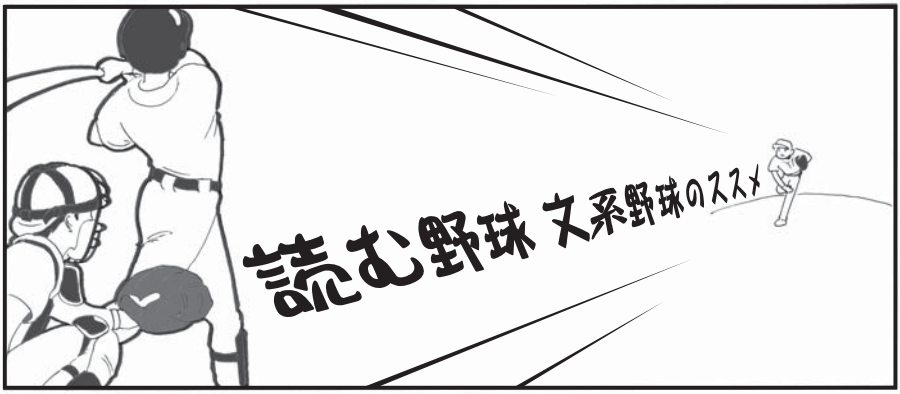
このような文学における表象は、現在に限ったものではない。ギリシャ喜劇であるアリストパーネス原作、佐藤雅彦訳『女の平和』（論創社・二〇〇〇円）は、戦争を止めさせるためにセックス・ストライキをおこなう、超先進的な女性たちを描いた作品だ。劇中には、男性器についての描写もあり、舞台では男性俳優たちが革製の陰茎をぶら下げていたそうである。

『キュロテ』

二〇一一年のノーベル平和賞を受賞したのは、リベリア内戦を終結させた女性ら三人であった。彼女たちが戦争を止めるために取った手段も、紀元前四一一年に初演された『女の平和』と同じセックス・ストライキであったという。受賞者の一人リーマ・ボウイーは、凄惨なDVに遭い、シングルマザーとなって苦労しながらも、非暴力の平和構築活動の中心を担うことになる。彼女の人生は、ペネロープ・バシュー著、関澄かおる訳『キュロテ　世界の偉大な15人の女性たち』（DU BOOKS・一八〇〇円）で美しいコミックとなっている。一読をおすすめしたい。

（選書：花伝社・山口侑紀／文学選書：ジュンク堂池袋本店・鎌田伸宏）

＊愛書家の楽園・特集「世界の起源」でご紹介した書籍は、ジュンク堂書店池袋本店一階エレベータ前と福岡店三階、丸善名古屋本店一階と京都本店地下二階にて、二月十日～三月九日までフェア展開中です。



この「書標（ほんのしるべ）」を手に取って頂いた方で、野球が好き、興味がある、という方はどのくらいいらっしゃるだろう。今号が発行される頃にはプロ野球の春季キャンプが始まり、ファンの今シーズンへの期待も高まっている頃である。今年の我が贔屓チームはどんなものなのだろうか？ドラフトで獲得した新人たち、オフに補強した新戦力も気になる。オープン戦や公式戦の日程を確認しなければ……と、ファンもいろいろ忙しくなってくる時期なのだ。本など読んでいる暇はないと言いたいところではあるが、今少しずつ広がりつつある「文系野球」をご紹介したい。野球の好きなあなたはもちろん、野球に特に思い入れのないあなたも、「文系」と「野球」という一見正反対な組み合わせに「ん？」と引っかかったらお立ち合い。

野球は日本人にとって人気が高く馴染みの深いスポーツの一つであり、様々な形で本になってきた。小説、ノンフィクション、ビジネス書や研究書、技術教本、マンガ、思いつく書名は多岐にわたる。実際にプレーするための実用的な本や専門的な本はちょっと置いておいて、野球というスポーツの魅力を文章で体験できる本。それが「文系野球」である。

野球ファンは野球というスポーツ、または野球選手に何を託すのか。投げられた小さなボールをバットで打ち、それが飛んでいくのがなぜこんなに人々を熱狂させるのか。野球が、戦争や災害からの復興の希望の証になったのはなぜか。作家はなぜ、野球を題材に物語を書くのか。ライターはなぜ球の行方を見つめ、記録するのか。失われた球団や過去の選手や試合を追うのはなぜか。

そこには、何か美しいものがあるからだと考える。もちろん野球とて闇の部分も抱えている。その問題を提起し、選手がよりよい環境でプレーできるようになるために広く訴えかける、その役目も本は担っている。ただここでは、野球というスポーツの魅力、夢中になる人々の野球への情熱、喜び、悲しみ、時に滑稽かもしれないがひたむきな姿、全てが愛おしく思えるような作品がたくさんあって、読んでから野球を見たら今までとは違う景色を見ることもできるのだ、ということをお伝えしたい。

ようこそ、文系野球の世界へ。

「文系野球選手オールスター2019」

以下、現在流通しており比較的入手しやすいものから文系野球オールスターを選出した。なぜあの選手が選ばれていないのか！というご意見もあろうかと思われるが、その選手はあなたのスタメンに是非、加えていただきたい。

凡例

①著者　②デビュー年（初めて書籍が出た年）③現在の所属（レーベル、出版されているシリーズ名）と推定年俸（定価）④寸評

『屋上野球』

①編集室屋上　②vol.1　二〇一三年　vol.2　二〇一四年　vol.3　二〇一七年　③編集室屋上・vol.1・2は一〇〇〇円、3は一二〇〇円

④この雑誌を語らずして文系野球を語ることはできない、画期的な野球雑誌。創刊号の特集からして「野球を失った野球小説」。堂々たる文系野球雑誌デビューを飾った。ここまで三号発行され、それぞれ「おしゃれ」「原発」「ラジオ」などを野球と絡め世に放っている。vol.4はどんな特集になるのか、期待大。

『屋上野球 vol.3』

『博士の愛した数式』

①小川洋子　②二〇〇三年　三，新潮文庫・五五〇円

④第一回本屋大賞受賞作は、美しい野球小説でもある。交通事故による脳の外傷で記憶が八十分しか持たなくなった元数学の教授「博士」は、阪神タイガースのエース・江夏豊のファンである。阪神時代の彼の背番号は28。これは「完全数」なのである。完全数とは「自分自身を除く正の約数の和に等しくなる自然数」（28＝14＋7＋4＋2＋1）。数学の美と野球の美を融合させた最後の五行は、文系野球の真骨頂だと言いたい。「江夏豊」のかっこよさに泣く。

『博士の愛した数式』

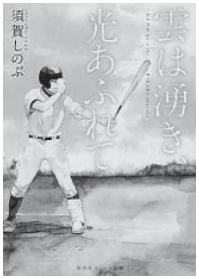
『赤ヘル1975』

①重松清　②二〇一三年　③講談社文庫・八八〇円

④広島カープの帽子は、もとは紺色だった。現在カープの色としてお馴染みの赤に変わったのが一九七五年である。広島の街に原爆が投下されてから三十年、その傷跡がまだ街にも人にも残っていた頃の物語。中学生のヤス、同級生のユキオ、東京から転校してきたマナブ、三人の少年を中心に広島の街と人々、奇跡を起こしたカープの一九七五年が語られる。

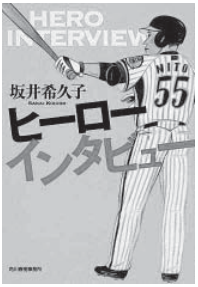
『赤ヘル 1975』

『雲は湧き、光あふれて』
①須賀しのぶ　②二〇一五年　③集英社オレンジ文庫・五四〇円
④高校野球を題材にした短編集。
表題作のタイトルは、夏の甲子園の大会歌「栄冠は君に輝く」の一節を用いている（ちなみにこの作詞者は試合中の怪我が原因で足を切断し、野球を続けられなくなった元球児である）。昭和二十四年、戦地から生きのびた男の耳にこの歌が聞こえたとき、彼は甲子園を目指していた頃を思い出す。戦時下の球児たちに何が起こったのか。野球選手が兵士となる世の中が二度と来ないことを願って。



『雲は湧き、光あふれて』

『ヒーローインタビュー』
①坂井希久子　②二〇一三年　③ハルキ文庫・六四〇円
④我々一般人からしたら、それがたとえ「二軍の帝王」でもプロ野球選手というだけで畏敬の対象であり、ものすごいスターなのである。プロ野球選手、その特別な存在とは何なのか、ということまで考え込んでしまう本作であるが、阪神タイガースの「二軍の帝王」である主人公の仁藤はおそらくそんなことは考えていない。ひたむきに野球に打ち込むだけ。そういう男なのである。そんなん、好きになってしまうやん。



『ヒーローインタビュー』

『球道恋々』
①木内昇　②二〇一七年　③新潮社・二一〇〇円
④明治時代。一高野球部出身、現在は業界紙の編集長を務める主人公・宮本。彼は母校野球部のコーチを引き受けることになった。特に目立った選手でもなかった自分がなぜコーチに？と思いながらも、学生の面倒を見るうちに宮本は野球にのめり込んでいく。うまくできなくても、生活の役に立たなくても、大事なものが人生にはある。それが野球ならなんて素晴らしいことだろう。もちろん野球でなくてもいい。あなたの愛する大事なものは何だろうか。

『球道恋々』

『ルーズヴェルト・ゲーム』
①池井戸潤　②二〇一二年　③講談社文庫・八〇〇円
④いちばんおもしろい野球のスコアは八対七である、と米大統領フランクリン・ルーズヴェルトが言ったから、八対七の試合はルーズヴェルト・ゲーム。二〇一四年のドラマ化も記憶に新しい本作。不況の時期における社会人野球のチームを巡る事情は読んでいるだけで

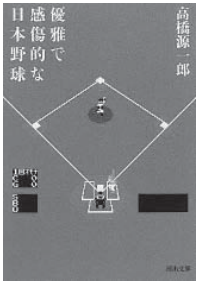
世知辛くて、勤め人として胃がキリキリするような思いである。ただそのような状況下でも、ゲームが始まれば、応援してくれる人のために全力でプレーするのが野球選手なのだ。野球ファン的には、やたら野球に詳しい社長秘書の登場が嬉しいポイント。多分彼女は仕事抜きで完璧に野球にハマってるね。

『ルーズヴェルト・ゲーム』

『素晴らしいアメリカ野球』
①フィリップ・ロス　②一九七六年　③新潮文庫・九九〇円
④原題は“The Great American Novel”（偉大なアメリカの小説）。なぜ野球を書くことが「偉大なアメリカの」小説になるのか。それを解明できるのは巻末の注釈と、村上春樹×柴田元幸による解説セッション。野球と小説から「アメリカとは何か」がわかってしまうかも。

『素晴らしいアメリカ野球』

『優雅で感傷的な日本野球』
①高橋源一郎　②一九八八年　③河出文庫・七〇〇円
④『素晴らしいアメリカ野球』の日本版を、との志で書かれたのがこの物語。登場するのは一九八五年の阪神タイガースの面々である。阪神タイガースってなぜか文系野球「映え」するのはどうしてなのだろう。特に一九八〇年代の。もし今これが書かれたら、登場するのはどのチームになるか想像してみるのもおもしろい。



『優雅で感傷的な日本野球』

『ユニヴァーサル野球協会』
①ロバート・クーヴァー　②一九八五年　③白水Uブックス・一六〇〇円
④一人の男の頭の中で、サイコロの目によって繰り広げられる架空の野球リーグ。その描写は微に入り細に入り、彼の全てを形成していた。しかし、それが崩れる日が来てしまう。一九六〇年代、まだ「ヴァーチャルリアリティ」という言葉もない時代の話である。これもまた野球を描くことによって「アメリカ」を描いた小説。

『ユニヴァーサル野球協会』

『最弱球団　高橋ユニオンズ青春記』
①長谷川晶一　②二〇一一年　③彩図社文庫・六四八円
④なくなったものと野球の相性はすごくいい、と言うと語弊があるだろうか。関係者はそれぞれの思いを抱いて、今

はもうない球団と、そこにいた自分を語る。一九五四年から三年間だけパ・リーグに存在した幻の球団・高橋ユニオンズ。「史上最弱」と言われた（実際その通算勝率は344であった）この球団の誕生から解散までを、関係者への丹念な取材と調査で追った労作。

『最弱球団
高橋ユニオンズ青春記』

『松坂世代』

①矢崎良一　②二〇〇三年　③河出文庫・七九〇円

④野球における「〇〇世代」という言い回しで最も有名なのは、松坂世代ではないだろうか。プロ野球選手になった者、その道を選ばなかった者。今となってはプロ野球の現役で活躍する者も少なくなっている。数多くの才能がきらめいた世代の記録。

『松坂世代』

『猫ピッチャー』

①そにしけんじ　②一・二巻二〇一四年　三巻二〇一五年　四・五巻二〇一六年　六巻二〇一七年　七・八巻二〇一八年

③中央公論新社・各八〇〇円

④数ある野球漫画の中からこちらをチョイスしたのは、主人公のミー太郎（オス・二歳。猫では初のプロ野球投手で、セロリーグのニャイアンツに所属）のかわいさもさることながら、「ピッチャーって猫っぽいほうが成功するのでは？　それを知った上でのミーちゃん?!」ということに気が付いてしまったからである。鋭い！　本格的かつわかりやすい試合の描写、ミーちゃんに翻弄されるチームメイトや対戦相手（人間）など、野球をこれから知りたい！という方にもおすすめしたい。

もちろん猫好きにも！

『猫ピッチャー』

『止めたバットでツーベース』

①村瀬秀信　②二〇一八年　③双葉社・一五〇〇円

④スポーツライター、応援団、現役選手、元プロ野球選手、僧侶に商店街のお弁当屋さんまで。野球を巡って彼らが見せるその姿は、純粋で、暑苦しくて、「あなたそんなに入れ込んじゃって大丈夫？」と心配にすらなるのである。実際辛い目に遭っている人も登場する。「人生は野球に似ている」と著者は言う。ボールはどこへ転がっていくのか、わからないからおもしろいのだ。だから、我々は野球に心惹かれる。

（三宮店・安藤）

今月のおすすめ

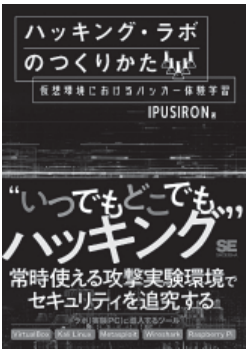
コンピュータ

ハッキング・ラボのつくりかた

IPUSIRON 著

孫子の兵法に「彼を知り己を知れば百戦あやうからず」とあるが、セキュリティも攻撃と防御、両方の知識が欠かせない。しかし実際にハッキングを行えば犯罪なので、仮想環境を用いて自分だけのハッキング・ラボを構築しようというのが本書。ターゲット端末のウェブカメラを操作したりブラウザ履歴を調べたりといったハッキング技術を、安全かつ実践的に学ぶことができる。

翔泳社　三八〇〇円



増補改訂 Pythonによるスクレイピング＆機械学習〈開発テクニック〉

クジラ飛行机著　一昨年発売され大ヒットしたスクレイピングの解説書が、大幅に加筆修正されて再登場。任意の情報をウェブから自動的に収集・抽出するスクレイピングと、得られたデータを分類・判定する機械学習。この二年間で変化した技術や状況に合わせてコードが全面的に見直されたほか、新しいスクレイピングフレームワークの章などが加筆されている。

ソシム　三二〇〇円

インテリジェンス駆動型インシデントレスポンス

Scott J.Roberts 他著　石川朝久訳

セキュリティの文脈におけるインテリジェンスとは、サイバー攻撃の事例を集めて類似するパターンを割り出し、攻撃者の能力や動機、目標を分析することを意味する。侵入検知や妨害といった実際のインシデント対応に加え、インテリジェンスを活かしてセキュリティプロセスを向上させる方法について解説している。

オライリー・ジャパン　三四〇〇円

ゲームプログラミング C++

Sanjay Madhav 著　吉川邦夫訳

共通する処理を代行し効率化してくれるゲームエンジンの利用が今日のゲーム開発の主流だが、コアとなっている部分はC++で書かれている。本気でゲームプログラマーを目指すのであれば、C++を使ってゲームの基本的な機能を記述できるだけのスキルは身につけたい。古典的なPongゲームの実装から3Dグラフィックス、衝突判定の作成までをも網羅した、ゲーム開発の新たなバイブル。

翔泳社　四六〇〇円

演奏するプログラミング、ライブコーディングの思想と実践

田所　淳著　ライブコーディングはコードをリアルタイムで音や映像に変換する、一種のパフォーミングアート。インストールすればすぐに始められるSonic Piや多種多様なリズムパターンを生成できるTidalCyclesなど、ライブコーディング向けに作られた言語に触れることで、業務で書くのとは違う、コーディングという行為自体に宿る魅力が浮かびあがってくる。

ビー・エヌ・エヌ新社　三二〇〇円

今月のおすすめ

自然科学

サルと屋久島
ヤクザル調査隊とフィールドワーク

半谷吾郎・松原　始著

林芙美子が作中に「月のうち、三十五日は雨」と残した小さな島は九州最高峰宮之浦岳と豊かな自然を有する。雪が積もりウミガメが産卵し、そして固有種ヤクシマザルが生息する。本書は三十年前に始まり今なお続くヤクザル調査隊に参加してきた霊長類学者半谷氏と鳥類学者松原氏による共著。名うての二人が「フィールドワーク」の実態をつぶさに記している。大荷物で山に入っても天候次第で即下山。独り寂しく待ったところでサルの出現は時の運。調査方法の見直しや論文が査読をパスし発表されるまでの紆余曲折など研究の厳しさが伝わってくる。岐路が豪雨で濁流に変わっていたり腐った食材でも体調を崩さない学生のたくましさなど、読み物としても楽しめる。

旅するミシン店　一六〇〇円

建築家　善兵衛旅日記
遊んで学んで考える三十一話

小倉善明著

建築家小倉善明は二つの名を持つ。一つは本名、もう一つは善兵衛。本書はこの別名による旅日記であるのだが、建築について語られることはほとんどなく、大半が釣り（遊び）に関するエッセイである。特徴的なのは、数話を除いて本書が「口語体」で書かれている点であろう。知られているように、坪内逍遙らに端を発する明治期の言文一致運動は、二葉亭四迷のツルゲーネフ翻訳が一つの終着点となり、以降大きな影響を与えた。新たな書き言葉が生まれたのである。この運動が、和漢混淆文などのような文体への反抗から生じたものであったのだとすれば、善兵衛の口語体での遊びもまた、法規に規定された建築家の言文一致運動であると言えるだろう。「設計という仕事は、空想を現実のものに変えていくプロセスのようなもの」と著者は言う。それは、「仕事＝遊び」という新たな労働の創出によって、可能となる。

日刊建設通信新聞社　一六〇〇円

宇宙飛行士に聞いてみた！
世界一リアルな宇宙の暮らしQ&A

ティム・ピーク著

宇宙飛行士にどんなことを聞いてみたい？

私は食いしん坊なので、まず質問するのは「宇宙食っておいしい？」ということ。あとは、体はつらくないのか、眠れるのか、怖い目に遭ったことはないかなど。なんだかこの先宇宙で住むためのアドバイスをもらおうとしているようだが、残念ながら今のところ予定はない。

本書は、宇宙飛行士ティム・ピーク氏にSNSを通じて寄せられた質問と、それへの回答といった形式で構成されている。人によって宇宙に対する知識や関心は違うので、質問の内容もさまざまだ。

しかし、著者はどんな質問であっても、丁寧に子どもにもわかるようにフレンドリーに答えている。

図やイラストを交えて三〇〇頁を超える本に仕上がったが、多くの質問に答えたいという著書の熱意の表れだと感じた。

日本文芸社　一八〇〇円

今月のおすすめ 医学書

医療現場で働く 管理職1年目の教科書

小西竜太著

医学管理職一年目のことを「ミドルマネジャー」と本書では定義し、そのミドルマネジャーにはどのようなスキルが必要かということを、二十四のケースに分けて解説する。そのスキルを分かち合い、医療現場において効率よく、効果的に、ストレスを減らし、やりがいを持って働いてほしいという著者の想い、希望、期待、願いをすべて詰め込んだ一冊。

メディカル・サイエンス・インターナショナル　二七〇〇円

福祉原理

岩崎晋也著

本書では、地縁や血縁といった特定の「関係に基づく援助」とは別に作られた「関係のない他者」を援助する仕組みを「福祉」と定義する。その「福祉」の必要性を正当化する論理を、歴史上の三つの局面に焦点を当て、壮大なスケールで描き出している。最後に、「福祉」に関わる三つの原理的な課題に対して、それぞれの社会がどのように取り組んできたのか、そして現代における理論的到達点を検討している。新しい社会福祉が向かうべき方向を指し示す、渾身の福祉原論。

有斐閣　三一〇〇円

ジェネシャリスト宣言

岩田健太郎著

旺盛な執筆活動を続ける著者の新作。「週刊医学界新聞」の連載が加筆訂正の上、書籍化された。「ジェネシャリスト」とは「ジェネラリスト」＋「スペシャリスト」の意である。医療の現場に横たわる二元論（男と女、ワークとライフ、アメリカ医療と日本医療等）を全て恣意的なものとして克服し、日本において少数派であるジェネシャリストへの導きの書になっている。フーコー、ヘーゲル、マルクスといった哲学者たちの思想を下敷きに持論を展開していく点に、著者の越境ぶりが伺える。

中外医学社　二〇〇〇円

あたらしい検案・解剖マニュアル

池谷　博・櫻田宏一著

名著と言われる専門書しかなかった今までのものとは少し視点を変えて、医科大・医科歯科大の教授により書かれた法医学の入門書。実際に経験したことがない人でも臨場感をもって読める構成と、鑑定の全体をバランスよく見られる内容になっており、法医学の歴史やそのシステム、解剖の方法・検査法、症例の判断などの項目も載っている。法医解剖は中立・公平性の視点から、大学などの独立機関で行うべき、という著者の思いが実現されるよう、これからの人材が育っていくための一冊になるだろう。

金芳堂　六八〇〇円

今月のおすすめ

社会科学

西洋の自死

ダグラス・マレー著

著者は新進気鋭のイギリス人ジャーナリストで、メディア露出のみならず、議会での演説経験もあるという。

本書ではヨーロッパ各国がどのようにして移民を受け入れ、何が起こり、現状に至ったのかを詳しく記述している。彼の主張はこのまま移民の受け入れを進めていけば、移民が多数派となり、ヨーロッパ各国、欧州そのものが別の国になってしまうという危機感である。歴史的な罪悪感から移民政策を進めてきたことも述べ、問題の困難さと複雑さを描いている。日本も同じ道を辿るのではないかという解説も付され、本書を読み解く重みが増す。

東洋経済新報社　二八〇〇円

資本主義の歴史 起源・拡大・現在

ユルゲン・コッカ著

資本主義の本質を、正確に理解することが難しいのは、資本主義という言葉の概念が様々に定義され、明確に規定することが困難だからだ。本書は、そんな資本主義の本質に迫るべく、その起こりから現在に至るまでを、各時代に資本主義の対極にあった概念を取り上げながら、「資本主義」という言葉が持つ概念の変容をコンパクトに、かつ分かりやすくまとめられている。

歴史学の大家が、自らの考察とともに資本主義の本質に迫った名著。

人文書院　二二〇〇円

忖度と官僚制の政治学

野口雅弘著

一昨年の森友・加計学園問題で世間を賑わせた、官僚による「忖度」。本書は官僚がなぜ忖度するのかを政治学的見地から説いた一冊。ウェーバー、シュミット、アーレント等の政治思想を用いて文書主義や政治の合理性からみる官僚の在り方を考察すると共に、官僚による忖度は国の基本政策や方向性をめぐる論争が封印されたことと無関係ではないとし、権力者のお気に入りになることが優位となる政治では、忖度が全てであるとしている。日本政治がそうした傾向にあるとするなら、危機感を覚えざるを得ない。忖度を通じて、真に政治的であるとはどういうことかがわかる一冊。

青土社　二二〇〇円

NEW POWER これからの世界の「新しい力」を手に入れろ

ジェレミー・ハイマンズ、ヘンリー・ティムズ著

伝統的な中央集権的権力から、フラットで一般参加型のコミュニティやネットワークへ。MeToo運動に代表されるように、技術の進歩に伴った力の在り方の変化は近年実感されるところである。

しかし新しい力が伝統的な力にとって代わるのではなく、肝要なのはそれらの

使い分けだ。本書ではオバマとトランプ、オキュパイ運動、ＮＡＳＡ、レゴといった多数の事例をひいて、この力の活用の成功・失敗を解説。新しい力は小さい組織にも大きな力をもたらすが、大企業でも使い方を誤ると大きな痛手を被る。転ばぬ先の杖として読んでおきたい。

ダイヤモンド社　一八〇〇円

福岡市を経営する

高島宗一郎著

現職の福岡市長による初の著書。アナウンサー経験から培った「シンプルに伝える」という信条が本書からも伺え、実に読みやすい。

なぜ弱冠三十六歳にして福岡市長に就任することになったか。そしていかにして福岡市を今日本で最も元気のある都市に変えていったのか。その経緯がつまびらかにされている。しかしこの本の主題は、現状に満足せずチャレンジすること、スピーディーに変革することの重要性である。未来を変えていく力を持つ若い世代への熱いメッセージが、この一冊に詰まっている。

ダイヤモンド社　一五〇〇円

サイバー空間を支配する者

持永　大・村野正泰・土屋大洋著

ネットワークの発達により、個人や企業などのさまざまな組織、すなわち政治や経済他あらゆるものが繋がっているサイバー空間。そこでは個人が組織や国家に影響を及ぼし得る。その空間を支配するのは一体誰なのか。

本書は今やＳＮＳ、ＩｏＴ等で我々の生活に大きな影響を及ぼしつつあるサイバー空間のことを丁寧に解説する。その現状と課題を明らかにし、米国や欧州、中国から遅れを取る日本はどう対応していくべきなのかを説いている。サイバー空間は現代人に深く関係する学ぶに相応しいテーマであり、本書はその一助となるに違いない。

日本経済新聞出版社　二三〇〇円

自己矛盾劇場

細谷　功著

著者はコンサルタントで著述家。問題解決や思考に関する講演を大学や企業に実施している。著書には、地頭力を鍛える、具体と抽象、など多数ある。

本書は、「多様性を受け入れろ」「もっと具体的に言え」「あの人はケチだ」など誰もが思ったことがあるであろう自己矛盾の言動をイラスト付きで解説。自分にも当てはまる事もあって物事を客観視できていないことを感じたが、最終的には全ての自己矛盾からは逃れられないので、うまく付き合って前向きなエネルギーに変えていくべきとしている。

ｄＺＥＲＯ　一八〇〇円

今月のおすすめ

人文科学

政治に口出しする女はお嫌いですか？

スタール夫人の言論vs.ナポレオンの独裁

工藤庸子著

女性が参政権を持たず、男性同伴でしか外出できなかったフランス革命の時代に生きたスタール夫人。その時代において知識人が交流するサロンを主宰し、自らも国家を論じた女性である。親密圏と公共圏をつなぐ場としてのサロンの存在、そこで交わされる言論を読み解きながら、自らも政治に参加した女性を描く。

勁草書房　二四〇〇円

蛮行のヨーロッパ

第二次世界大戦直後の暴力

キース・ロウ著

戦争が終わったからといって、誰もがすぐ幸せになれるわけではない。第二次大戦直後のヨーロッパでどんなにひどいことが行われたか。昨日までの価値観がひっくり返る混乱のなかで、誰もが怯え、攻撃的にならざるを得ず、その意味では戦争は全く「終わっていなかった」のである。「復讐」と「愛」。戦慄の記録。

白水社　七四〇〇円

キリスト教講義

若松英輔＋山本芳久著

批評家と哲学者という異なる分野で活躍している二人が、ともに同じ神父に学び四半世紀にわたって積み重ねてきた対話のエッセンスをぎっしりと詰め込んだ本書は、愛・神秘・言葉・歴史・悪・聖性の六つの切り口をもとに今までにない角度からキリスト教について語ろうと試みた画期的な一冊。より理解を深めたい方には巻末のブックリストも必見。

文藝春秋　一八五〇円

精神科医が教える忘れる技術

岡野憲一郎著

誰しもひとつは持っている「思い出したくない過去」。忘れたくても忘れられない……。そんな悩みのある人はたくさんいるだろう。本書は、忘れられないケースとその解説、忘れられないメカニズム、忘れる技術の伝授の三部構成で、丁寧な言葉でわかりやすく解説されている。辛い気持ちから抜け出すためにオススメの一冊。

創元社　一四〇〇円

2033年の日本と図書館に向けて

吉井　潤著

著者が二十九歳から五年間図書館長として勤務した日常と、話題となった社会的トピックスとを上手く絡めながら綴られていくエッセイ集。時事ネタも随所に見られ、「あぁ、こんなことあったなぁ」と共感しながら読み進めること必至。

数年後の未来を考え生活することがあると日本はいい方向へと進むかもしれない。そう述べる著者の様に自らの生活と今後の社会について思いを馳せる切掛に。

樹村房　二〇〇〇円

今月のおすすめ

文学・文芸

ガルシア＝マルケス「東欧」を行く

G・ガルシア＝マルケス著　木村榮一訳

一九五七年。当時三十歳で新聞記者として働いていたガルシア＝マルケスが、壁が崩壊する以前の東欧の民主主義諸国を初めて訪れた時のルポルタージュ。

私有地がないため境界を示す柵は無く、永遠に辿りつかない地平線に向かって車を走らせている気分になるソ連。当たり前の様に平原にコカ・コーラの看板は一つもない。ナイトクラブで口説いたチェコの女性は、擦り切れて足指がのぞいていてもナイロンの靴下を大切に履き続け、ブタペストではパン屋よりも宝くじ売場に人が群がっていた。

酒場のトイレの落書きに注視し、サッカーの競技場に足を運ぶ。鉄のカーテンの裏側に潜入したガルシア＝マルケスの九十日間は、民衆に深く入り込み、その体制を容赦なくあぶり出す。そのジャーナリストとしての視点は面白く、今読んでも充分刺激的だ。信じがたいほど窮屈な体制も人間の成せるわざ。そう思うと、当時の東欧諸国に暮らす人々が何故か愛しく思えてくる。まさにマジックリアリズムなのである。

新潮社　二二〇〇円

私に付け足されるもの

長嶋　有著

鋳型、ということをたくさん書いた短編集だと思う。長嶋有さんの小説に登場する女の人は、みな日常の業務をこなすさまが魅力的だ（仕事、プライベートにかかわらず）。本書では、女性が業務をこなしていくうえで彼女たちが寄り添う「鋳型」がたくさん登場する。それは、ネイマールの西川マットレスであったり、ゴキブリをつかまえる道具であったり、ベータのビデオデッキであったりする。

作中には、「同じ鋳型におさまりつづけているうち眠りだけでない、肉体が、暮らしが、象られるような感じがしないだろうか」とある。（「桃子のワープ」より）主人公・桃子は、警備員という仕事をしながら毎日「誰かに指示された場所」に出向くことを、「仕事の面白み」だと感じている。彼女は移動をすることで、同じように移動して世界の競技会場に出向くアスリートを思い、坂を降りる乳母車を見ながら「戦艦ポチョムキン」を思い出す。鋳型は、そうなりたいという願望であり、時に呪いでもありえる。そのことをじゅうぶんに長嶋作品の女の人たちがわかっている気がするから、読んでいてここまで安心感を私たちは抱くことができるのではないだろうか。

鋳型は、ひとによってつくられたもの。「かつて、大昔に、誰かや誰かに対して抱いた自分の気持ちに、今また瞬時に降り立ったのだ」と桃子は思う。そのような感覚を持ちながら生きる、正直な登場人物がいるからこそ、やはりまた今日も長嶋有作品を読もうと思えるのである。

徳間書店　一五〇〇円

今月のおすすめ

文庫・新書

怖い橋の物語

中野京子著　中野京子といえば「怖い絵」シリーズなどの絵画に関する書籍でご存じの方も多いと思う。二〇一七年に行われた「怖い絵」展を観に行ったけれど、実に面白かった。

この本は、絵ではなく様々な橋に関する話が収録された一冊。怖い橋や奇妙な橋、意外な展開を迎える不思議なエピソードも多く収録してあり、ちょっとした幻想小説を読んでいるかのようだ。

「橋」は異世界を繋ぐもの―日常と非日常を橋渡しすると考えるのは、国は違えど多くの民族で共通しているそうで、引き込まれるような文章で様々な物語が描かれている。

いつもは特に考えずに渡っているけれど、この本を読んだ後に橋を渡るとき、その橋の物語を想像して少しゾッとした気持ちになるかもしれない。

河出文庫　八〇〇円

おんなの城

安部龍太郎著　時代に翻弄されながらも、戦国の世を生き抜いた四人の「おんな」を描いた歴史小説。戦国時代は、男尊女卑の色濃い時代。武士、特に戦国大名にとって、娘は外交の道具であることも普通だった。嫁入りは他家と友誼を結ぶための手段であり、嫁＝人質であることも珍しくなかったのだ。

その様な時代でも、強く生きようとした女性はいたのである。夫のため、息子のため、家のため、信仰のため。四人の女性たちは、「おんな」という立場や自身の心の弱さを乗り越えて、自分の守りたいもののために奮闘していく。命を賭けることすら厭わないその生き様は、鮮烈な印象を残す。

四編ともに素晴らしいのだが、個人的におすすめなのが単行本未収録であった「希望の城」。立花道雪の娘で立花宗茂の妻である立花闇千代を主人公として、関ヶ原の合戦の裏で行われていた、九州での戦いを描いている。

立花宗茂・闇千代夫妻の不仲の理由や、黒田如水の真意などに対して独自の解釈が試みられており、福岡出身の作家である安部龍太郎だからこその作品に仕上がっている。各話百ページにも満たない短～中編だが、あえて最後まで書かない手法は強い余韻を残す。

文春文庫　七〇〇円

えーえんとくちから

笹井宏之著

呪文のような、なんどもくちずさみたくなるような、不思議な音のならびのタイトル。これは「えーえんとくちからえーえんとくちから永遠解く力を下さい」という、著者の代表作からの引用である。

二十六年という短い生涯の中で、澄み切ったまなざしで自分の周囲の世界を短歌というかたちで切り取り続けた歌人、笹井宏之。その三十一音のことばは、うつくしく、やさしく、時に哀しく、読んだ人のこころを釘付けにして離さない。何度も読み返し、そのたびにぎゅっと抱きしめたい衝動にかられる。この本を。この歌人を。

文庫化を機会に、いつも鞄の中にしのばせておきたい一冊に、だれかの暗闇の光を照らす一冊になることを願う。

ちくま文庫　六八〇円

今月のおすすめ　芸術

泥沼スクリーン

春日太一著

時代劇・映画史研究家、春日太一が週刊文春に連載している人気コラム「木曜邦画劇場」が待望の書籍化。

連載開始までは評論家として決して一人称で映画を語らないことを信条にしてきた著者。その信条を曲げて映画に対する偏愛を語り尽くす。文章から垣間見える著者の青春時代のエピソードの数々、映画との関係に胸が熱くなる。

また、巻末のライムスター宇多丸との対談も読みごたえがある。

その対談の中で、二人は映画評論家の意見に対して盲目的な信者になるのではなく、自分の目で見て考えることの大切さを説いている。

映画を観た後、人はどう感じたのかなどネットでつい調べたりすることがある。批判的な意見があると、自分は面白かったと思ってもそう言えなくなったり、評論家の大家が「良い」と言っていると安心したりする自分を省みた。

映画を観よう。自分が面白いと思えばそれでいいじゃないか、と背中を押してもらえた気がした。

文藝春秋　一四五〇円

ペンギンクラシックスのデザイン

ポール・バックリー編

洋書の棚に並ぶ、小型のペーパーバック。その表紙や背表紙に、いつものペンギンマークをみつけると、愛らしさ故か何となく嬉しくなってしまう。斜め上にくちばしを向け、戯けたような表情でこちらを見つめるペンギンは、ロンドンに本社を置くペンギンブックス社のアイコン。本書は、出版されている数々のレーベルの中でも、古典的名著シリーズ「ペンギンクラシックス」を彩ってきたブックデザインを纏めたものだ。

伝統的で統一感のある表紙から、そこに遊び心が加えられた表紙。ポップアート調やアメコミ風の派手やかなものから、装飾文字だけのシンプルなもの。気の遠くなるような刺繍作品。型抜き、箔押し、コラージュ、ポートレート……。採用されなかった幻のデザインも含めて、四百を超える装幀が収録された。

制作中のいざこざや完成後の欠点を含めても、「この表紙が好きだ」と言い切る著者。関係者たちの裏話を知れば、ページを開いた後の物語を更に楽しむことができるだろう。

スペースシャワーネットワーク　三二〇〇円

顔真卿伝

時事はただ天のみぞ知る

吉川忠夫著

中国の書家として、王羲之と並んで名を馳せる顔真卿。日本では空海や榊莫山といった書家が、その特徴的な楷書体に影響を受けたとして知られてきた。

今回刊行されたのは、顔真卿の生涯を書業に限らず詳細に記した初の人物伝。学業を家業とする名家に生まれ、忠義の果てに壮絶な最期を迎えるまでが描かれている。

本書を読めば、今後彼の作品を鑑賞する目も変わりそうだ。

法藏館　二三〇〇円

今月のおすすめ 実用書 地図・旅行書

最短5分で運気アップ！ 山手線ぶらり 時短ご利益まいり

JTBパブリッシング監修

時短ご利益まいりとは、文字通り「時短でおまいりができる」こと。

本書では山手線沿線の駅から徒歩十五分以内、アクセスの良いご利益スポットが厳選されているので、忙しくてなかなか足を向けられなかった人に最適。時短ご利益まいりだからこそ大切な、参拝の心構えや基本、疑問点もピックアップして解説されているので、お参りを時短ですませていいのかしら?と思っている人にも安心だ。

山手線の駅二、三駅ごとにエリア分けして一社ずつ紹介されているほか、休日など少し時間がある時にいくつかのご利益スポットを巡る、ご利益散歩なるプランも紹介されている。せわしない毎日だからこそ、少しの時間を見つけてご利益散歩にいってみたい。

JTBパブリッシング　一三〇〇円

大人の礼服とマナー

美しいひとBOOKS編

年齢が上がるにつれて、様々な「公的な場」に出る機会が増えていく。まずは友人の結婚式。それから親戚のお葬式。制服を着ていればよかった学生時代とは違い、一人前の大人としての振る舞いを求められる。さらに年齢を重ねると、子どもの入卒式、取引先との会食、結婚式での祝辞など、より幅広く、多様な場に対応しなければならない。

なんとなく「たぶんこんな感じ」でやってきたけれど、本当にこれで大丈夫?一度、きちんと服装のマナーを学んでおいた方がいいのでは?という不安を抱えた方にお薦めしたいのがこの本。

通常のマナー本とは全く違う、美しい装丁。服装に特化しているせいか、ふんだんに使用されるカラー図版を眺めていると、まるでシックなファッション誌を眺めているような気持ちにさせられる。

文響社　一四五〇円

止めたバットでツーベース

村瀬秀信野球短編自撰集

村瀬秀信著

サッカー至上主義者としては、悔しい。とても悔しい。やっぱりこの国は野球の国なのか、と打ちのめされた気分になるくらいおもしろい。目次を眺めただけで、ニヤニヤしてしまう。書き下ろしも収録した十八の短編集のタイトルには「近藤唯之」「文系野球の聖地」「ヤクルト芸術家」など野球ファンの食指を動かす人名やワードが並ぶ。どの短編も野球をどうしようもなく愛してしまった野球バカたちに笑わされ、心を熱くさせられるが、特に「PLチャーハン」がオススメだ。清原和博とPLの後輩でありマネージャーを勤めた野々垣武志のエピソードはぜひ読んでいただきたい。

双葉社　一五〇〇円

今月のおすすめ

語学・辞典

続 特派員直伝 とらべる英会話

読売新聞国際部＆The Japan News編

読売新聞日曜日付「えいご工房」で連載中の人気コラム八十六回分をまとめたもの。執筆しているのは読売新聞国際部の海外特派員。彼らが現地を飛び回る中で知った旅や日常生活で役立つフレーズを臨場感あふれるエピソードとともに紹介している。「英会話」と銘打っているものの、本格的な英会話の本ではなく、トラブルのエピソードが主役となっている話も多い。小学校でトイレに行きたくて「バスルーム（bathroom）」と先生に訴えたのに、「迎えのバス（bus）は来ているよ」と促されてピンチに陥ったことなど。読み切り連載なので、「続」とあるが、本書から支障なく楽しめる。

海外旅行の参考に、または東京五輪などを控えて増加する外国人との会話に活用にどうぞ。

研究社　一三〇〇円

子どもに聞かれて困らない 英文法のキソ

大竹保幹著

小学校から英語を教科として学ぶことになった今、小中学生の子を持つ親たちが心配になってきているのは「子どもに聞かれたらどうしよう」「英語は自信がない」という不安ではないだろうか。学生時代に英語が苦手だった人ならなおさらだろう。そういった不安を解消するために、英文法の基礎をおさらいすることで英語を教える自信をつけてもらうことをねらっているのがこの本だ。英文法の復習本なのだが、堅苦しくなく雑学的な要素も含まれているので容易に読み進めていくことが出来る。

全六章から構成されていて、それぞれの章をクイズ形式で問題を解いていく形になっているので、初めから読み進めても、途中から始めても飽きずに進められる。文法を教える時のポイントがまとめられているので、それを参考にすることも出来、読み進んでいくうちについつい文法を教えたくなってくる本である。

アルク　一五〇〇円

マンガで体得 ビジネス英語によろしく

竹村和浩著

人気漫画『ブラックジャックによろしく』の主人公・斎藤が、サラリーマンとなり、入社三年目でありながら、突然国内営業から海外営業部に配属になる、というところからストーリーが始まる。

著者曰く、ビジネス英語の学習は、基本フレーズの暗記と同時に、その場面でのイメージを伴って臨場感とともに学習することが大事だそうだ。漫画による場面設定により、実際に今後直面するかもしれない「英語を使わなければならないビジネスシーン」を臨場感もって疑似体験し、主人公に共感しながら各場面に必要なビジネス表現を習得していける。

構成としては、各場面の漫画を読んで主人公の置かれている状況をイメージする。次にダイアローグやプレゼン資料を読んで音読したり、書いたりする。最後に各場面で使えるフレーズを暗記していく。どんな「ブラックな」状況でもトラブルに対応する主人公・斉藤とともに、ビジネス英語を体得しよう。

ＤＨＣ　一一〇〇円

今月のおすすめ　児童書

「いたいっ！」がうんだ大発明
ばんそうこうたんじょうものがたり

バリー・ウィッテンシュタイン文
クリス・スー絵
こだまともこ訳

今や日常生活にかかせないばんそうこうは、おっちょこちょいのマダムのおかげで生まれました。アールさんの奥さんはぶきっちょで、台所に立てば指が傷だらけになってしまいます。アールさんは、粘着テープの上にガーゼを貼り、ばんそうこうを作りました。怪我をしても、ペタッと貼れば大丈夫。これは便利と、アールさんが働いている会社で量産して販売すると、とぶように売れ、今では世界中で使われています。困ったな、あればいいな、という気持ちは、すばらしい発明を生みます。この絵本は、小さな発見で、世界中のくらしが大きくかわったことを、楽しく伝えてくれます

光村教育図書　一四〇〇円

うかいのうがい

さくらせかい作

冬本番。風邪が流行るこの時期に欠かせない「うがい」は「鵜飼」が語源らしく、魚を飲み込まずに吐き出す鵜の姿と似ていることから来ているそう。その由来をユーモアたっぷりに描いています。

危ない目にあっていた五匹の鵜たちを助けた漁師のハンさん。魚の取り方を熱心に教えていて喉を痛めてしまい、うがいをしたところ、それを見た鵜たちもまねをして「がらがら　うー」。すると魚たちが集まってきて……!?　両者のやりとりが何ともほほえましく、特にみんなでリズミカルにうがいをする場面では思わず笑いをさそうので、子どもたちに楽しみながらうがいの習慣をつけてもらうのに、もってこいかもしれません。水色を基調としたのびやかな背景や川の流れが、ゆったりとした時間をはこんでくれます。

ブロンズ新社　一三〇〇円

ぼくのたび

みやこしあきこ作

ぼくは小さな町のホテルで働いている。ここにはいろんな国からいろんな人がやって来る。ぼくはまだ、この町から出たことはないけれど、眠るときはいつも、ここではない遠いところに思いを馳せる。そして、夢のなかで自由に気のむくままに旅を続けるのだ。

独特の画風で光と影を描いてきた著者が、新たにリトグラフの手法を使い、読者を旅に誘います。初めて出会う光景に感動しつつも、懐かしく感じるのはなぜでしょう。乾いた風やまぶしい太陽のなんと心地いいことか。思わずここから飛び出して、どこかに出かけたい衝動に駆られたり、懐かしい土地を思い出し、ふと胸を締め付けられたりもします。そう、それはまるで人生の旅のようにも思えます。読む年齢や心持によって味わいの異なる一冊。

ブロンズ新社　一五〇〇円

読者から

『冷血（上・下）』

和泉（いずみ）　蜻蛉（せいれい）

『冷血（上・下）』（新潮文庫・高村薫著）を読んでいるとき、もしかしたら実際に起こった事件のルポを読んでいるのかもしれない、と思った。もちろんフィクションなのだが、あまりにもリアリティーがありすぎる。思わずめまいがしてしまうほどだ。とても気楽に読めるミステリーではない、と断言する。

高村薫の作品らしく、警察内部の描写なども真に迫っている。パチスロなどのディテールも圧倒的で驚く。作品はずっしりと重く、読み終えると気分が滅入る。読了した後、憂鬱になってしまうこと請け合いだ。人間にはどうあがいても消すことができない悪意があるし、救いようがない存在なのだと達観してしまう。

歯科医一家殺害の犯人を生み出した原因を、社会のヒエラルキーに求めるのはたやすい。事件を起こした井上や戸田は本当に悪なのだろうか。小説を読み進めても、世間が納得するような動機が明らかになるわけではない。しかし現実に起きている陰惨な事件も、そんなものなのかもしれない。

読み終えると、我々はなぜ物語を読むのだろう、と不思議な気分に陥った。高村薫の文章は読みやすいとはいえないが、読み慣れるとさして苦にならない。高村薫の作品は、おおむねすべて読んでいる。著者と同時代を生きて、幸せだと感じた。骨太のミステリーを読みたいなら、絶対にお薦めできるミステリー作品だ。

（四十四歳・療養中）

＊『冷血（上・下）』（新潮文庫・高村薫著・上巻七一〇円、下巻六七〇円）

「子どもの幸せとは……」

澤　導子

福島に住む私は、原発事故周辺地域に住む子どもたちのことが常に頭から離れません。「もう八年になるのに……」「いいえ、まだ八年になるところなのです……」

身体を使って外で遊ぶことの少なくなった被災した子どもたちは、メディアにむしばまれる危機を体験し、今もって苦しんでいることと思われます。

『メディアにむしばまれる子どもたち』を読み、子どもたちの幸せについて考えさせられました。メディア漬けから脱出して五感ををフルに活動させるときに味わう幸せを体験すること……。自分を信頼し、大切に思う心……。

作者のメッセージを多くの人に知ってもらいたい、という思いでペンを執りました。

ＡＩに無縁な私（パソコンもスマホも持ちません）ですが、次のような本を、作者に導かれ、子どもの幸せとは何か、という視点からざっと読んでみました。

『ＡＩvs.教科書が読めない子どもたち』

『ＡＩに負けない「教育」』

『あなたを支配し、社会を破壊する、ＡＩ・ビッグデータ』

「数学破壊兵器」により格差が広がり、子どもたちの夢や希望がかなえられなくなる社会―アリ地獄のような、社会そのものが崩壊に向かうような場所―からの脱出には「モラルのある想像力」が必要だとキャシー・オニールは言います。ＡＩに負けないためには「読解力を身につけ、人間らしく、柔軟になることが大切」と新井紀子は言います。渡部信一は、個々人の「学びの意味」や「生きている意味」（知識の質）が知識の量よりも大切になってくると言います。「子どもたちに必要なのは笑顔と感動の毎日です。」と田澤雄作は言います。現実を乗り越えるパワーが感じられます。

子ども時代を五感を大切にして感性豊かに過ごすことで、モラルある想像力や読解力を身につけ、人間らしく柔軟に生きていく力をつけ、知識の質を向上させていくことが幸せな生き方につながっていくのでしょうか。

今の子どもたちは、何という困難な状況の中で幸せを見つけていかなければならないのだろう、という感想を持ちました。

（七十歳・主婦）

＊『メディアにむしばまれる子どもたち』（教文館・田澤雄作著・一三〇〇円）
＊『ＡＩ vs. 教科書が読めない子どもたち』（東洋経済新報社・新井紀子著・一五〇〇円）
＊『ＡＩに負けない「教育」』（大修館書店・渡部信一著・一八〇〇円）
＊『あなたを支配し、社会を破壊する、ＡＩ・ビッグデータの罠』（インターシフト・キャシー・オニール著・一八五〇円）

『新版　インドの生命科学　アーユルヴェーダ』

由　まこと

数年前、アーユルヴェーダのワークショップを受け、インドの予防医学を知った。いつかアーユルヴェーダ的な生活をしたいなあと思っていたことを思い出し、図書館で見つけた。ワークショップでの資料も引っぱり出し、読みすすめている。

サンスクリット語でアーユルとは「生命」、ヴェーダとは「科学」「知恵」を意味する。インドの伝統医学であり、予防医学なのだ。万人向けの学問であり、誰でも実践できる。

まずは自分の体と心を見つめること。自然な無理のない生活をしていくことの大切さを改めて心に留めることができた。体内リズムを整える、五感を使う、生命と宇宙の法則を知る、など幅広く、優しく、時にハッとさせられる多くのことを教えてくれる。

どのように一日を過ごすか、日々の中で何を選択していくか。今までじっくり考え、行動できなかった分、今、大切に時間を過ごしていきたい。　（四十七歳・主婦）

＊『新版　インドの生命科学　アーユルヴェーダ』（農文協・上馬場（うえばば）和夫、西川眞知子著・四三〇〇円）

ATION

丸善
名古屋本店
☎(052)238-0320
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
名古屋栄店
☎(052)212-5360
〔営業時間〕10時～20時

丸善
名古屋セントラルパーク店
☎(052)971-1231
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
ロフト名古屋店
☎(052)249-5592
〔営業時間〕10時半～20時

ジュンク堂書店
名古屋店
☎(052)589-6321
〔営業時間〕10時～21時

丸善
岐阜店
☎(058)297-7008
〔営業時間〕10時～21時

丸善
四日市店
☎(059)359-2340
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
滋賀草津店
☎(077)569-5553
〔営業時間〕10時～22時

丸善
京都本店
☎(075)253-1599
〔営業時間〕11時～21時

ジュンク堂書店
京都店
☎(075)252-0101
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
高槻店
☎(072)686-5300
〔営業時間〕10時～22時

MARUZEN &ジュンク堂書店
梅田店
☎(06)6292-7383
〔営業時間〕10時～22時

丸善
八尾アリオ店
☎(072)990-0291
〔営業時間〕10時～21時

丸善
髙島屋大阪店
☎(06)6630-6465
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
大阪本店
☎(06)4799-1090
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
難波店
☎(06)4396-4771
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
天満橋店
☎(06)6920-3730
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
上本町店
☎(06)6771-1005
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
近鉄あべのハルカス店
☎(06)6626-2151
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
奈良店
☎(0742)36-0801
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
西宮店
☎(0798)68-6300
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
芦屋店
☎(0797)31-7440
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
神戸住吉店
☎(078)854-5551
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
三宮駅前店
☎(078)252-0777
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
三宮店
☎(078)392-1001
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
神戸さんちか店
☎(078)335-2877
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
舞子店
☎(078)787-1250
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
明石店
☎(078)918-6670
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
姫路店
☎(079)221-8280
〔営業時間〕10時～20時

丸善
岡山シンフォニービル店
☎(086)233-4640
〔営業時間〕10時～20時

丸善
広島店
☎(082)504-6210
〔営業時間〕10時～22時

ジュンク堂書店
広島駅前店
☎(082)568-3000
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
高松店
☎(087)832-0170
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
松山店
☎(089)915-0075
〔営業時間〕10時～21時

丸善
博多店
☎(092)413-5401
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
福岡店
☎(092)738-3322
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
大分店
☎(097)536-8181
〔営業時間〕10時～20時

丸善
天文館店
☎(099)239-1221
〔営業時間〕10時～20時半

ジュンク堂書店
鹿児島店
☎(099)216-8838
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
那覇店
☎(098)860-7175
〔営業時間〕10時～22時

INFORM

MARUZEN &ジュンク堂書店
札幌店
☎(011)223-1911
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
旭川店
☎(0166)26-1120
〔営業時間〕10時～19時半

ジュンク堂書店
弘前中三店
☎(0172)34-3131
〔営業時間〕午前10時～
午後7時

ジュンク堂書店
盛岡店
☎(019)601-6161
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
秋田店
☎(018)884-1370
〔営業時間〕10時～20時

丸善
仙台アエル店
☎(022)264-0151
〔営業時間〕10時～21時
日・祝10時～20時

ジュンク堂書店
仙台TR店
☎(022)265-5656
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
新潟店
☎(025)374-4411
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
郡山店
☎(024)927-0440
〔営業時間〕10時～19時

丸善
水戸京成店
☎(029)302-5071
〔営業時間〕10時～21時

丸善
丸広百貨店飯能店
☎(042)973-1111
〔営業時間〕10時～19時

丸善
丸広百貨店東松山店
☎(0493)23-1111
〔営業時間〕10時～19時

ジュンク堂書店
大宮髙島屋店
☎(048)640-3111
〔営業時間〕10時～21時

丸善
桶川店
☎(048)789-0011
〔営業時間〕10時～21時

丸善
津田沼店
☎(047)470-8311
〔営業時間〕10時～21時

丸善
舞浜イクスピアリ店
☎(047)305-5808
〔営業時間〕11時～21時
土・日・祝10時～21時

ジュンク堂書店
南船橋店
☎(047)401-0330
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
柏モディ店
☎(04)7168-0215
〔営業時間〕10時半～20時

MARUZEN &ジュンク堂書店
渋谷店
☎(03)5456-2111
〔営業時間〕10時～21時

丸善
丸の内本店
☎(03)5288-8881
〔営業時間〕9時～21時

丸善
日本橋店
☎(03)6214-2001
〔営業時間〕9時半～20時半

丸善
お茶の水店
☎(03)3295-5581
〔営業時間〕
月～金10時～20時半
土10時～20時
日・祝10時～19時

丸善
多摩センター店
☎(042)355-3220
〔営業時間〕10時半～21時

丸善
有明ワンザ店
☎(03)5530-5701
〔営業時間〕10時～19時半

丸善
メトロ・エム後楽園店
☎(03)5684-5130
〔営業時間〕10時～21時

丸善
新宿京王店
☎(03)5321-8327
〔営業時間〕10時～20時

ジュンク堂書店
池袋本店
☎(03)5956-6111
〔営業時間〕10時～22時

ジュンク堂書店
プレスセンター店
☎(03)3502-2600
〔営業時間〕11時～19時

ジュンク堂書店
大泉学園店
☎(03)5947-3955
〔営業時間〕10時～22時

ジュンク堂書店
吉祥寺店
☎(0422)28-5333
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
立川髙島屋店
☎(042)512-9910
〔営業時間〕10時～21時

丸善
横浜みなとみらい店
☎(045)323-9660
〔営業時間〕11時～20時

丸善
ラゾーナ川崎店
☎(044)520-1869
〔営業時間〕10時～22時

ジュンク堂書店
藤沢店
☎(0466)52-1211
〔営業時間〕10時～21時

ジュンク堂書店
岡島甲府店
☎(055)231-0606
〔営業時間〕10時半～19時

丸善
松本店
☎(0263)31-8171
〔営業時間〕10時～20時

MARUZEN &ジュンク堂書店
新静岡店
☎(054)275-2777
〔営業時間〕10時～21時

営業時間は変更する場合がございます。ご了承ください。
定休日については、お手数をおかけしますが弊社HPまたは直接各店までお問い合わせ下さい。

投稿募集

☆読者の皆様の投稿を募集しています。最近読まれた本の感想文、本にまつわるエッセイ、など本に関するもの。最近読んでおもしろかった本、感動した本、考えさせられた本を教えて下さい。四〇〇字～六〇〇字程度で、おすすめの本のタイトル、出版社、住所、氏名（ペンネーム可）、年齢、職業を明記の上、お送り下さい。掲載分には二千円の図書カードを差し上げます。なお、原稿はお返しいたしませんのでご了承下さい。

☆尚、本誌掲載と同時に、ホームページにも掲載させていただきます。

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二―一五―五
丸善ジュンク堂書店「書標」編集室係
TEL〇三―五九五六―六一一一

いつも「書標」をご愛読いただきまして
ありがとうございます。本誌定期購読料は
以下の通りです。
定期購読料　年間一二三〇円（送料込）
現金書留もしくは八十二円切手十五枚で

お申し込み先

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二―一五―五
丸善ジュンク堂書店特急便係
TEL〇三―五九五六―六一二〇
FAX〇三―五九五六―六一〇〇

PC・スマートフォンから
http://www.junkudo.co.jp/
QRコード

ブックブレスユー

編集後記

大寒が過ぎる頃になると、またインフルエンザが猛威を振るいだす。先日医療機関に行ったら、カーテン越し右隣の患者さんは妊婦さんで、左は受験生くん、さぞ心配だろうと思った。冬来たりなば春遠からじ。春の訪れを祈りたい。（緒）

本屋うらはなし

「時刻表」

冬のレジャーの定番がスキーだった学生時代に、友人と連れ立って車で長野へ出かけようとしたことがありました。七人乗りセミ四駆のラルゴで名神高速道路を北上中に、アクセルを踏み込む以上にエンジンの回転数が上昇する異常に見舞われ、突如スピードがダウン。ギヤを変えてもどうにもなりません。クラッチ板の寿命で滑りが出たのです。やむを得ず拡張工事前の天王山トンネルの入り口で路肩に寄せて停止。身がすくむ思いでトンネル内を壁伝いに歩いて非常電話に取り付きました。というのもこのトンネル、当時は事故と渋滞が多発することで有名だったのです。いつ何時、車線にはみ出している故障車に後続が突っ込んでくるかわかりません。幸い無事でしたが、JAFに引きずられてもと来た道を取って返すことになりました。レッカーされて高速を走るという貴重な体験。

米原インターあたりで待ち合わせだった滋賀在住組との合流も叶わず、次の日の始発列車で大阪から信州を目指すことになりました。もちろんお金は無くて時間はある大学生は「青春18きっぷ」です。携帯電話の普及前で滋賀組とどうやって連絡を取り合ったか思い出せません。でも、それが当たり前の時代だったので、不測の事態に備えて事前の取り決めをしていたのだと思います。

友人宅で雑魚寝の翌朝、スキーの荷物一式を担いで時刻表を片手に旅が始まりました。こんな時は案外、皆の面倒を見てくれる奴がちゃんと出てくるのです。一回だけ間違えたけれど、それ以外は見事に乗り継ぎ列車を確認して先導してくれました。一冊の時刻表を頼りに夕方の白馬駅まで。普段は気が良くてからかわれることが多く場を和ませる役目の彼が、頼もしく見えたことを良く憶えています。多少の待ち時間や列車の繋がりの悪さも楽しみつつ、思い思いの話をしたり車窓を眺めたり。

今日、たまたま時刻表の問い合わせを受けてふと思い出した次第です。あの時スマホで路線情報を検索できたなら、彼を頼もしく思うことも無かったのだろうか。乗り換えの失敗で雪化粧をした松本駅のホームで蕎麦をすすることも無かったのだろうか。

レジに立つ新人研修ではまず最初に、お問い合わせが特に多いNHKテキストと時刻表の場所を必ず憶えておくように指導してきましたが、どうやら時刻表の地位が危ういようです。書店員も時代に乗り遅れないようにしなければ……。

（風）

「書　標　ほんのしるべ」　第483号
編集・発行人　工　藤　恭　孝
発　行　所　㈱丸善ジュンク堂書店　〒160-0008　東京都新宿区四谷三栄町十一番二十四号　ニューフィールドビルディング
印　刷　所　㈱七　旺　社　〒653-0012　神戸市長田区二番町四丁目二十七番地
二〇一九年二月五日発行　頒価五十円（本体四十六円）

「書標　ほんのしるべ」昭和61年7月15日第三種郵便物認可
2019年2月5日発行（毎月1回5日発行　通巻第483号）

MARUZEN JUNKUDO × サマリーポケット

預けた本は一覧で管理。タイトルや作者もデータ登録！

文庫本なら1箱に130冊入ります！
サイズ：幅35cm × 奥行33cm × 高さ29cm

丸善ジュンク堂書店のお客様限定プラン！

3箱保管プラン | 通常月額1,200円 ▶ 20%OFF 960円

5箱保管プラン | 通常月額2,000円 ▶ 30%OFF 1,400円

詳細はこちらから
https://spkt.jp/maruzen

※バーコードを読み込んで画像やタイトルをデータ登録します。バーコードがないもの等は適宜まとめて写真を撮影します。 ※価格は全て税別表示です。

ご利用方法は簡単4ステップ

1
専用サイトで申し込み

2
届いたボックスに
本を詰めて送るだけ

3
預けたものは
PC・スマホで管理

4
使いたい時、最短翌日に
取り出せる

本の保管場所に悩む、すべての方へ

ジュンク堂書店
淳久堂書店

MARUZEN

頒価　五十円（本体　四十六円）